



8月

季節のおはなし・旅便り

夏本番！

ひまわりのように元気にお過ごしですか？

8月は立秋を迎える月ですが

まだまだ暑さは続きそうですね。

スイカにかき氷、浴衣に花火…

暑さの中にも、季節のうつろいを感じながら

残りの夏も、笑顔で過ごせますように！

水分補給しつかりしながら、元気に夏を乗り切りましょう～



8月 おはなし

心を結ぶ、夏のしきたり

8月13日～16日頃は、日本の大切な行事…お盆の時期です。この時期は、さぞ先祖様の靈が家に帰ってくるとされ、迎え火を焚いてお迎えし、精進料理やお花でおもてなしをします。夜になると、地域によっては灯籠流しや精霊流しが行われ水面にゆらゆらと揺れる灯りが、とても現象的です。そして、夏の夜空には盆踊りの太鼓の音が響き渡り、どこか懐かしい日本の夏を感じさせてくれます。

お盆といえば、帰省ラツツシユや家族の再会もこの時期の風物詩ですね。久しぶりに顔を合わせる家族や親戚…小さな子どもたちの笑い声が聞こえるお盆の風景はここがホッと温かくなるようなそんな力があります。

夏祭り・花火大会

夏の夜…どこからか聞こえてくる太鼓の音。提灯がゆらゆらと灯る境内では、地域のお祭りが始まります。浴衣を着た人たちがぞろ歩き、りんご飴や焼きそばの屋台からは、いい香り…子供たちはしゃべ声と笑顔があふれて、まるで昔にタイムスリップしたような、懐かしい日本の夏が広がります。そして夜空に大きな音とともに咲く、大輪の花火…胸に残る一瞬の輝き…夏祭りと花火大会は、人と人がつながる大切な時間心のどこかに残り続ける、夏の思い出のひとつです。

大切な日本の心 受け継ぎたい、夏の記憶



8月といえば、日本の夏を感じる風物詩がたくさんありますね。ひまわり畑、風鈴の音、かき氷、そして浴衣姿の人々…旅先でそんな光景を見かけると、心がホッと和みます。夏の風景とともに、皆さまの旅が心に残る思い出になりますように…また8月は、日本の行事がたくさん詰まった大切なひと月です。ご先祖様を偲ぶお盆、夜空を彩る花火大会、そして平和を祈る日もあります。どの行事も、季節の移ろいや心をつなぐ大切な時間。一つひとつを丁寧に、思いを混めて過ごしたいのです。



平和への祈り

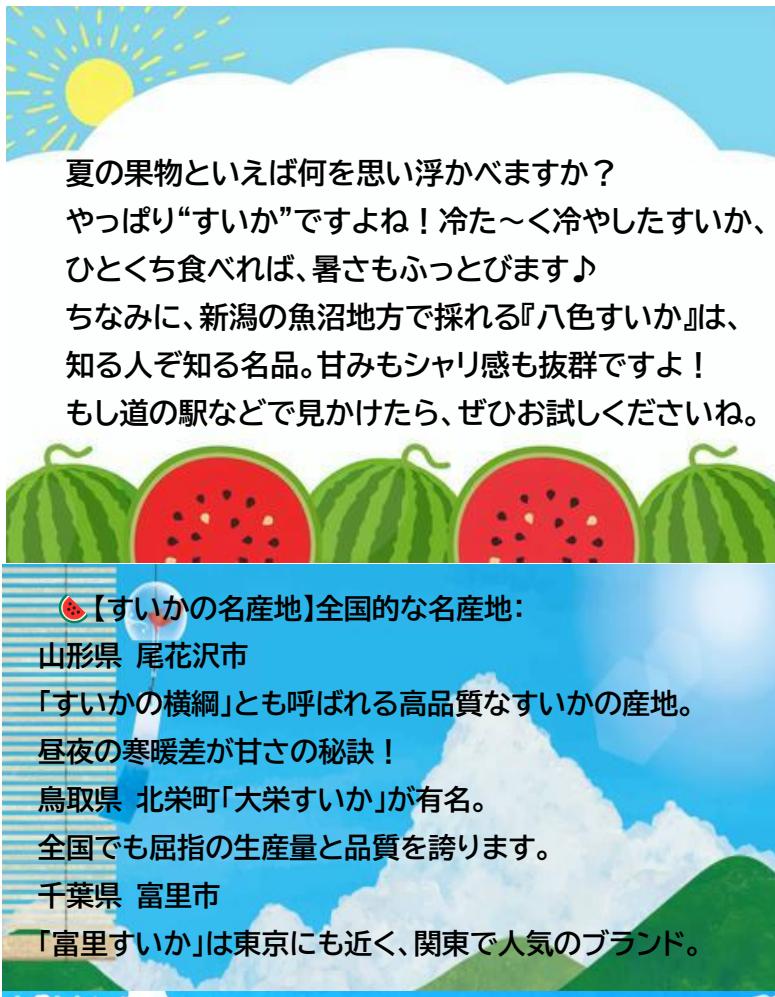
8月は、日本にとって「平和」について深く考える大切な月でもあります。8月6日は広島、9日は長崎に原子爆弾が投下された日そして15日は終戦の日です。この時期、日本各地では平和祈念式典や灯籠流しが行われ、戦争で亡くなった方々に祈りをささげ、平和な未来への願いが静かに込められます。水面をゆっくりと流れる灯籠、手を合わせる人々の姿。それは、過去の出来事を忘れず、二度と繰り返さないという私たちの誓いでもあります。夏の空の下、命の尊さ、平和のありがたさを心に刻むひとときとなりますように…



暦の上では立秋を迎えると「秋の気配」が始まります。

とはいって、空はまだ夏の青
蝉の声が賑やかに響いて、陽ざしもまぶしいですね。
けれど、ふと吹いた風に涼しさを感じたり、夕暮れが少しずつ早まっていたり…
そんな小さな変化に、季節の移ろいを見つける頃です。
立秋は、暑中見舞いから残暑見舞いへと言葉を変える目安にもなっています。
夏の名残りを楽しみながら、ゆるやかに秋を迎えていきましょう
☆2025年の立秋は 8月7日(木)

立秋



夏の果物といえば何を思い浮かべますか？
やっぱり“すいか”ですよね！冷た～く冷やしたすいか、
ひとくち食べれば、暑さもふっとびます♪
ちなみに、新潟の魚沼地方で採れる『八色すいか』は、
知る人ぞ知る名品。甘みもシャリ感も抜群ですよ！
もし道の駅などで見かけたら、ぜひお試しくださいね。

【すいかの名産地】全国的な名産地：

山形県 尾花沢市

「すいかの横綱」とも呼ばれる高品質なすいかの産地。

昼夜の寒暖差が甘さの秘訣！

鳥取県 北栄町「大栄すいか」が有名。

全国でも屈指の生産量と品質を誇ります。

千葉県 富里市

「富里すいか」は東京にも近く、関東で人気のブランド。

すいか割りの意外なルーツ

海辺やキャンプで盛り上がる「すいか割り」

実はこの遊び、江戸時代にはすでに力試しや宴の余興として楽しめていたとか。

昭和に入ると、夏のレクリエーションとして人気があり、なんと 1970 年代には「日本すいか割り推進協会」なる団体まで登場！

「剣は長さ 1 メートル 20 センチ以内」「審判がいて、割れ具合で得点をつける」など、公式ルールもあったそうです。

すいかひとつで、こんなに奥深い世界があるなんて、驚きですよね。

すいかの話題

1. 【すいかの旬】

すいかの旬は 6 月下旬から 8 月中旬ごろ。まさに今が食べごろです！

暑い夏にぴったりの果物で、水分が 90% 以上とたっぷり含まれています。

2. 【すいかの豆知識】

・すいかは野菜？果物？→ 実は、分類上は「野菜(ウリ科)」ですが、甘くてデザートにされるので「果物扱い」されることが多いです。

・黒いすいかをご存じですか？

→ 新潟県の特産「八色すいか」は、皮が黒っぽくて、シャリっとした食感と甘さが特徴。

まさに“雪国のすいか”です！

3. 【風物詩としてのすいか】

すいか割り、すいかの種飛ばし、すいかアイスなど、夏のレジャーや思い出の中にすいかはたくさん登場しますね。

夏の風物詩、スイカにまつわる心温まる話

昔々、ある田舎の小さな村に、おじいさんとおばあさんが住んでいました。二人は畑を耕し、四季折々の作物を育てていましたが、特に夏になると、見事なスイカを育てることで有名でした。

ある年の夏、村は大干ばつに見舞われ、畑はどこも枯れ始めました。

しかし不思議なことに、おじいさんのスイカ畑だけは青々と茂り、大きなスイカが実っていたのです。村人が理由を尋ねると、おじいさんはにっこり笑って言いました。

「スイカは、水よりも“愛情”が好きなんだよ。毎日話しかけて、ありがとうって言ってやるんじゃ。」

それを聞いた村人たちは、自分たちの作物にも感謝の気持ちを伝え始めました。すると少しずつ、畑が元気を取り戻していったのです。

そして村は再び緑豊かに。スイカは“感謝の気持ちを忘れない心”を教えてくれる、大切な夏の宝物になりました。

日本の「かき氷」・千年を超える涼の文化

【平安時代】貴族の特権「削り氷」

かき氷は1000年以前の日本にもありました。

貴族だけが食べられる「削り氷」とよばれる食べもので、

氷を削って、甘葛という植物の汁をかけて食べていました。

この頃は、とても贅沢なスイーツだったんです！

【江戸時代】氷屋の誕生と氷の保存技術

冬に山で切り出した氷を氷室で夏まで保存する技術が発展。

庶民にも徐々に氷が流通するようになりましたが、非常に高価で

「一杯のかき氷が一両」(=数万円相当)とも言われていました

【明治～大正時代】製氷技術の進化と大衆化

明治時代になると、人工製氷技術の発展により氷が安価に。

屋台や駄菓子屋で売られるようになり、「いちご」「レモン」「メロン」などの合成シロップ文化もこの頃に登場。

【昭和～平成】レトロな「夏の定番」へ

・かき氷器が家庭にも普及し、夏の風物詩に。

・夏祭りの屋台ではおなじみの存在に。

・1990年代には「練乳がけ」や「宇治金時」など多様なトッピングも登場。

【令和時代】アート&グルメ化

ここ10年ほどで「かき氷専門店」が続々と登場し、天然氷や果実ソース、

スイーツとの融合など ご褒美スイーツとして再評価。

特に日光・長瀬の天然氷**はブランド化され、国内外の観光客にも人気

かき氷は単なる冷たいおやつから、日本独自の季節文化へと進化しました。

過去の贅沢から、今の感動へ——千年の時を越えて、私たちの夏を彩る存在です。

今のかき氷はふわふわで、まるでケーキみたい！

天然の氷・手づくりのフルーツソース・チョコや

ミルクのトッピングなど、

オシャレでおいしいかき氷がたくさんあります。

写真をとって SNS にのせる人もかなり増えて」います

「令和」のかき氷革命

この夏、口どけの芸術を体験しよう



② 二條若狭屋 寺町店(京都・寺町二条)
和菓子技術を活かしたアート氷。「彩雲」や
「あんみつ氷」など、器も含めて“和モダン芸術”

① コロンバン原宿サロン(東京・原宿)
白鳥メレンゲの「スワン」2,500円や、焼きメレンゲ×アイスの
「ベイクドアラスカ」など、アート作品のようなかき氷が話題



③ シャングリ・ラ 東京「メロンかき氷」

メロン1個分を削った氷＆ホイップに、
うちわクッキーや金魚ゼリーなど
夏祭り風デコレーションが超フォトジェニック



天然氷 × 映えスイーツの名店紹介



阿左美冷蔵 寶登山道店(埼玉・長瀬)

明治23年(1890年)創業の天然氷蔵元が手がけるかき氷専門店。1992年からかき氷提供を開始し、以降大人気(o^-^o)ニ

雪のようにきめ細かく「ふわふわ」の氷。和三盆や果実シロップがかかった「蔵元秘伝みつ」などが名物

松月氷室(日光・栃木)

明治27年創業の天然氷蔵元直営店。日光には天然氷の氷室が3軒あり、希少性が高い
真冬の寒さと清流の水でじっくりと作る天然氷は、密度と透き通るような口溶けが特徴
「手作り甘露」や「梅酢シロップ」など、素材の風味を引き立てるシンプル&上品なメニューが評判
通年営業で、季節限定のいちごメニューなども人気



どちらも天然氷ならではのふんわり食感と、自然の甘みを活かした上品な味わいが魅力



8月におすすめの「関東・甲信地方」のお出かけスポット

夏らしい自然や涼しい避暑地を中心にピックアップ

お盆休みを迎えると、街も人もなんとなくゆったりとした空気に包まれます。

どこへ行っても混みあうこの時期ですが、それでもやっぱり、少しだけ足をのばして、夏の景色に触れたくなるものです。

暑さを逃れて涼を求めるなら、高原や渓谷など、自然が広がる避暑地がおすすめ。

軽井沢や清里高原、奥日光などは、朝夕の風がひんやりと心地よく、どこか懐かしさを感じさせてくれます。

混雑を避けて静かに過ごすなら、森の中にあるカフェや、小さな湖畔の宿もいいかもしれません。

川のせせらぎや蝉の声に耳をすませながら、心と身体をリセットしてみてはいかがでしょうか。

「少しだけ非日常へ」——そんな気持ちを大切に、今年の夏も自分らしい“ひとやすみ”を見つけてたいですね。

夏の軽井沢へ(長野県)

木立をわたる涼風と、小川のせせらぎに心ほどけるひととき。旧軽井沢の街並みをそぞろ歩き、白糸の滝でひんやり涼感。暑さを忘れる高原の休日を…



標高約1000m。平均気温は東京より5~7°C低め。

旧軽井沢の街並みは、散策が楽しいエリアで魅力がぎゅっと詰まっています

旧軽井沢銀座通り

軽井沢散策の中心地。クラシックな建物が並び、カフェ・パン屋・雑貨店などが点在。

ぶらりと歩くだけでも楽しめます。

ミカド珈琲のモカソフト

観光客に大人気。モカの香りが濃厚なソフトクリームは、夏の定番スイーツ！

フランスベーカリー

ジョン・レノンも通ったとされる老舗パン屋。クロワッサンやフランスパンが有名



元祖手打ちそば 玉川屋

創業百年を超える老舗そば処。香り高い手打ちそばは、のど越し抜群。

名物の「天ざるそば」や季節限定メニューも人気。

昔ながらの風情ある店内で、ほっとひと息(＼＼>◡<●)。♪♡



八ヶ岳のふもと、清里高原へ。

澄んだ空気と緑に包まれて、のんびり牧場めぐり。美術館で静かな時間を過ごし、

夜は満天の星空にうつとり。夏でも朝晩は肌寒く、心まで涼やかな高原



尾瀬(片品村)

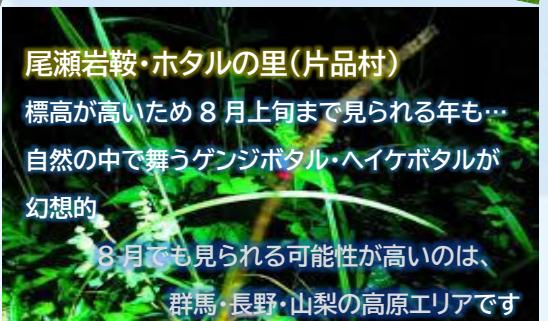
標高約1400m、夏でも涼しいハイキング天国。

木道を歩きながら湿原や高山植物を楽しめる。

清里高原(山梨県)

美しい牧場風景と爽やかな気候。

清泉寮のソフトクリームは必食。



尾瀬岩鞍・ホタルの里(片品村)

標高が高いため8月上旬まで見られる年もある

自然の中で舞うゲンジボタル・ハイケボタルが幻想的

8月でも見られる可能性が高いのは、群馬・長野・山梨の高原エリアです

花火物語

浴衣・団扇・屋台の匂い…

子供の頃、手を引かれて歩いた夏の夜

空に打ち上がる光の音が

あの頃の記憶を呼び起す

心の中に、今も続いている夏の物語

一瞬のきらめきが、永遠の記憶になる♦

長岡まつり大花火大会(新潟県)

開催日:8月2日~3日

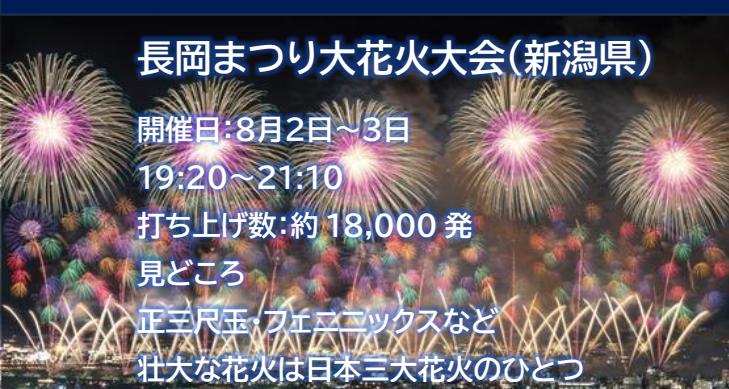
19:20~21:10

打ち上げ数:約 18,000 発

見どころ

正三尺玉・フェニックスなど

壮大な花火は日本三大花火のひとつ



♦ 夏の夜空に、ちょっと通な花火のおはなし

夏の風物詩といえば、やっぱり花火。

でも、ただ「きれい～」で終わらせるのはもったいない…

たとえば、色の秘密。

赤はストロンチウム、青は銅——って、まるで理科の実験みたい。

そんな金属の化学反応が、夜空を彩っていると思うと、ちょっと感動！

どーん！と響く大玉は「尺玉」と呼ばれ、空に咲く直径はなんと 300 メートル。

想像するだけで、首が痛くなりそうなスケール感です。

ひとつ、またひとつ咲いては消える光の花に、今年も静かに、心とのえる夏の夜です。

日本の夏を代表する8月の注目花火大会についてご紹介…
この夏！全国各地で繰り広げられる華麗な花火を
是非、お楽しみください

びわ湖大花火大会(滋賀県・大津市)

開催日:8月8日 19:30~20:30

打ち上げ数:約 10,000 発

舞台:湖面に映る光と大玉・音楽との演出も美しい花火



関門海峡花火大会

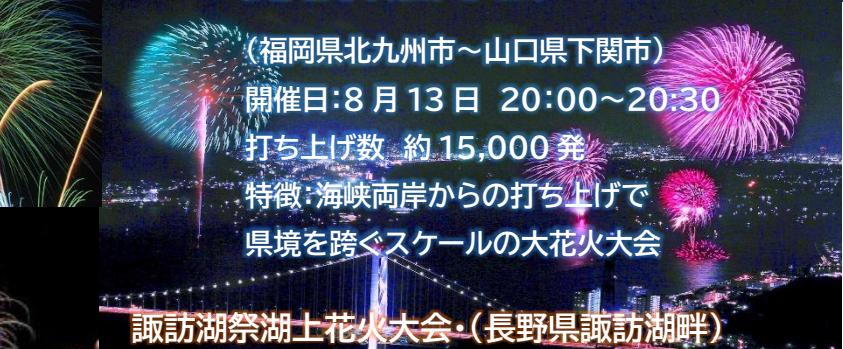
(福岡県北九州市~山口県下関市)

開催日:8月13日 20:00~20:30

打ち上げ数:約 15,000 発

特徴:海峡両岸からの打ち上げで

県境を跨ぐスケールの大花火大会



諏訪湖祭湖上花火大会・(長野県諏訪湖畔)

開催日:8月15日 19:00~

打ち上げ数:日本最大級・4 万発

湖上ならではの水上スター・マインをはじめ、

圧倒的なスケール感を誇る演出が目白押し。

諏訪湖サマーナイト花火 2025

諏訪湖では 7 月下旬から 8 月下旬まで毎日花火が打ち上がる

東京の夏の風物詩・神宮外苑花火大会

開催日:8月16日 打ち上げ数:10000 発

今年も素敵なアーティストが神宮の夏を彩ります！



日本三大花火大会といえば、大曲(秋田)・長岡(新潟)・土浦(茨城)

それぞれに趣があり、一度は訪れてみたい夏の風物詩です

そうそう、花火師といえば「玉屋！鍵屋！」の掛け声でもおなじみ。

江戸時代から続く花火づくりの名門、いまもその伝統は引き継がれています。

最後にちょっとした豆知識

線香花火、関東では“上向き”、関西では“下向き”が主流です。

地域によって風情の楽しみ方も、少しずつ違うのですね。